



就職小説・
トリプルサプライズ面接



ken

就職小説・トリプルサプライズ面接

土曜日の夕方、自分の部屋でパソコンにデータを打ち込んでいた手を止めた。ようやく終了したのだ。ディスプレイには『模擬面接企画書』と書かれている。プリントアウトした。全員に配布するためである。自分を入れて4枚。メンバーは全員が大学3年生である。

まず、通称オカマのケンこと久保謙太。夜、アルバイトをしている。

立田一郎。かろうじて4流大学以下とランク付けをされた国際北条大学に入学。手の内を見せないズルサがある。要注意だ。金田和夫。やたらとプライドは高いが根拠は見当たらない。

最後は三輪京介。ボクである。とっても気配り上手。だから、へんてこりんなサークルのリーダー兼下働きを拝命することになった。でも、こういった世話係は得意。企画を立案し実行することは好きである。評価点をつけられるのが楽しみ。良くも悪くも励みになるからだ。座右の銘は——スッポン根性——食いついたら離さない。

サークルといっても大学では公認されていない。だから費用は全部、メンバーが公平に負担する。面接会場は京介のアパート。国際北条大学学生指定宿舎。横の連絡が早い。

翌日、メンバーが京介の部屋に集まった。机の上には履歴書が置かれている。向こう側の椅子にオケンが座り女性の面接担当者に化けていた。就職活動で最初に対応するのは女性が多い知ったことが立ち上げた理由。女性面接者との会話に慣れなければならない。転ばぬ先の杖というやつだ。向かい合って金田和夫が座っている。

「それでは、面接を始めます」

京介は宣言した。ちょっと興奮気味である。

金田は立ち上がり丁寧に挨拶をした。

「よろしくお願いします」

と、言って内心、つぶやく。

(なんで、コイツに敬語をつかう必要があるんや)

目で威嚇した。

「そこに、お座り」

「なにッ!？」

即座に金田は怒りの声を発した。

「おれは犬か!」

「はい、不採用——!」

金田は赤い顔をして立ち上がった。

「不採用だとオ。まだ始まってないだろ」

「ちょ、ちょっと待ってよ」

京介は即座に割って入った。そして、

「ケンカしないでよ」

「だって失礼よ、こいつウ——」

オケンは口をとがらせて言った。色白のスベスベした顔肌が高潮している。それが色っぽく見せていた。ゲイバーでアルバイトをしているので手入れが行き届いているらしい。

「こ、こいつだとォ——！」

金田は激しくにらみつける。

「まって、まって。女性人事担当者と大学新卒の応募者との関係だからさ」

その言葉に今度は立田が三輪に冷たい視線を向けた。

「あのな」。立田が、ゆっくりと口を開く。そして、すこし間をおいて言葉を続ける。

「あのな、無理があるのでは」

「なにがムリよ。なりきっているのにさ！」

「いやいや、オケンではなくて企画だよ企画」

立田はオケンの抗議を和らげると京介に責任のすべてがあるといった目を向けた。

「いいかい、今年の就職活動で内定の決まった先輩女性を選ぶべきだろ」

その言葉に京介は内心、反論する。

（もちろん、それは考えたさ……）

候補者もいた。社会保険労務士試験研究会に参加している先輩の白鳥玲子。大手銀行に内定していた。彼女にお願いすると引き受けてくれるに違いない。ただ、問題がある。問題というのは相手を見下す傾向。はっきりと言うタイプ。まあ、それは我慢できるがオナベという風評があった。切れると豹変するという話も聞いている。運営に自信が持てない。

「わかった。ゼミの先輩にお願いしよう」

だが、意外にも反対に、引け受けてしまった。ズルのお前に負けるものかといった闘争心に着火したらしい。

「おう、いいじゃん」

立田は歓喜の声を発した。そして、せかすように——、

「で、だれ？」

「白鳥玲子さん。大手銀行に内定」

とっさに言い切った。

「いいじゃん、いいじゃん」

立田は、そうやってチラッとオケンの表情を盗み見した。オカマとオナベの対決を期待したのかもしれない。

一週間後の日曜日。京介の部屋に4人のメンバーが集まる。いつもと違うのは、ちょっと良い香がすること。その源は白鳥玲子である。女性面接担当者として椅子に腰掛けて机の上の履歴書に見入っていた。

「面接を始める前に、気をつけることを説明します」

笑顔を浮かべ、ゆっくりと、噛み砕くような口調で話しかける。すでに銀行員といった雰囲気漂わせている。

「履歴書の書き方につきまして説明させていただきますが、その前に、面接の順番はどのように……？」

そのとき、立田が勢いよく手を上げた。無言のため白鳥は気がつかない。履歴書に見入ってるからだ。

「そうですねえ……名前の五十音順に……」

白鳥は少し考えてから呟くと、今までに見られない大きな声が響いた。

「ジャンケンに——してください！」

立田である。あげた手を開きながヒラヒラしている。まるで白鳥に手を振るように。瞬時に周りの視線を集めた。

「ジャンケンで、お願いします！」

もう一度、同じことを言った。白鳥は一瞬、驚いたが笑顔を崩さない。しかし内心は嘲笑していた。

（馬鹿か、こいつらは……）

勝手にジャンケンが始まる。

「ジャンケン——」

四人が手を高々と上げる。

「ポイッ?!」

立田はグーを出したが、他の三人は全てチョキである。立田の顔は勝ち誇った表情に変わった。作戦が成功したという勝利の笑い。手をヒラヒラさせていたのは、このためである。

「ぼくは最後でいいよ。これでも代表だから」

「ワタシ、譲るわ」

京介の言葉のあとにオケンが続いた。

「では、決まりましたね」

白鳥は笑顔を崩さなかったが内心は軽蔑している。

（幼稚園児以下のアホどもめ!）

「面接を始める前に二つのことを注意します。履歴書の書き方と人事調査のことです」

「ええと……人事調査って何ですかァ」

オケンが質問した。

「はい、説明しますね」

（だから、これから説明するって言ってるだろうに——!）

「内定を出す前に身元調査を行います。家族と別居しているときは両方の調査を行います。部屋の前に不用物は置かないこと。放火されたら大変ですからね。それから、購読している新聞や雑誌はチェックされます」

そういつて見回すと、金田がつぶやいた。

「エロはだめだな。専門書を置くか」

「でも、それって人権侵害でしょ？」

オケンの言葉に立田が茶化した。

「女装じゃマズイだろう。同棲と思われる」

「同棲は、きちんとした説明ができること。将来の方向性で責任感の有無が問われます。人権については侵害しない範囲内で。個人情報などを守りながら行われます」

それでもオケンは不満そうである。そして、「人物本位だと思います。本人の能力しだいだと思いますけど」

抗議するように言った。

「そう。人物の能力本位です。それが基本」

(お前に、どんな能力があると言うんじゃ。おう、言うてみい——)

白鳥は視線を外して内心、激しく叫んだ。

「では、履歴書を書くときの大事なことを説明します。まず、しっかり読めること」

その言葉に、金田は当たり前という表情を浮かべた。しかし、先ほど白鳥が見たとき流し書きのように、楷書を少しくずした書き方をしていた。特技の欄に習字と書いている。自信があるようだ。問題は許せる範囲内か、そして好感の有無である。

「採用する会社の現場は原本を見ていないことです。コピーが多く、小さい文字は間違っ読まれる危険がありますので注意です」

丁寧に説明した。しかし緊張感の無い表情。

(これだけ説明しても反応が無いとは……オメーたち、どこも受からんぜ)

「立田一郎さん、前の椅子におかけください」

白鳥の言葉に、立田は嬉しそうな顔をしながら向かい合って座った。

「さっそくですが、応募した理由をお聞かせてください」

まず、最初に面接で質問されることである。

「はい。ぜひ、採用して欲しいので応募しました」

「……」

白鳥は思わず椅子から、ころげ落ちそうになった。同時に心の中で叫んでいた。自慢の笑顔をしっかりと保ちながら。

(クソこきやがってバカヤロー！)

白鳥は自分にシグナルを送る。忍耐、忍耐。でも。全員が、こんな調子で進むのであれば途中でやめると結論を出しながら……。

「仮に、入社しますと、どのような、お仕事を希望しますか」

「て、言うか、どんな仕事がありますか」

(質問を質問で返すな。馬鹿の定番だよ)

「人事、総務、経理、業務など。興味のある分野はありますか。資格などは」

「とりあえず、人事部門を希望します。人の評価とか、見る目は肥えていますから。資格は入社してから考えます」

「分かりました。では、これで面接は終了します。結果につきましては後ほど、ご自宅に郵便で通知します。ありがとうございました」

「い・え、い・え」

立田は胸を張って椅子から離れる。

白鳥は模擬面接評価表を取り出し、周りに見えないように点数とコメントをつけた。履歴書の書き方－２０点。覇気は－２０点。目的意識－２０点。髪など清潔感－２０点。面接の心得－２０点。最後に４流大学－２０。（６項目の判定結果は合計－１２０点。なによこれ。人間じゃないよ）

白鳥はあきれて呟いた。

１項目２０点。６項目で減点主義をとっている。金田和夫は合計－２０点。減点部分は４流大学の項目だけ。久保謙太は－６０点。三輪京介は－２０点だけである。減点部分は４流大学が理由である。ただし、別記のコメント欄には社交性、責任感、協調性、礼儀は、いずれも満点。高感度OKと記録した。

「これで模擬面接は終了します。結果は、三輪京介君と金田和夫君が大学３年生として平均点に達しております。これから本番にかけて他の受験生と競争することになりますが個性を出して頑張ってください」

終了の言葉に京介は立ち上がって丁寧に頭を下げてお礼を述べた。

「ありがとうございます。最後に、ひとつだけ教えてください」

「はい、どのようなことでしょうか」

「個性のことです。白鳥先輩が実際に一流会社に内定しましたが、個性についてアドバイスをいただきたいのです」

いいこと聞くじゃないのと白鳥は思った。

「個性とは自分だけが持っている特長。自分を売り込む強烈な刺激。それが静であれ動であれ相手の心に突き刺すこと。いいですか。現実の社会は減点主義。言葉や歩き方、姿勢、装飾品、香り、全てが重要。ですから——」

そう言ってから間を置いた。そして、

「就職活動は激しく限らない戦争です。第一印象は完璧に！」

大学生４年生の就職活動は日増しに変化した。良い方向ではなく悪い方向に。就職戦線に寒風の兆しと新聞の見出しを占め、残暑が終わり、さわやかな風が秋を運んできた１１月のはじめになると内定取り消しが続出。内定の会社が破綻。会社の業績悪化をカモフラージュのため大学新卒者を偽装採用の記事。

京介は次第に落ち着かなくなっていた。それは他のメンバーも同じである。模擬面接を再開しようという声が出たのは当然だった。

「また、白鳥先輩に頼もう」

合言葉のように意見が一致したのである。

「わかった！！」

京介は引け受けた。座右の銘は——スッポン根性——食いついたら離さない。しかし、白鳥玲子に進化した４人を見て欲しいと頼んだが、彼女は笑顔を見せながら、あっさりと断った。

「インターンシップで、すでに研修が始まっているの。もしかすると……人事部門は無理かなあ

。でも、頑張るわ。負けないように」

そのときだけ寂しさを見た。そして、彼女は、いや先輩は学生を脱皮したことを悟った。
「代わりに親友の小夏さんを紹介するわ。望月小夏。ぜったい、キミの好みよ」

そう言って、今度は本当に楽しそうな笑顔を見せた。大学で絶対に結婚相手を見つけると、以前、小夏から聞いた言葉を思い出したのだ。小夏の父は会社を経営している。

京介は学生食堂で紹介された望月小夏に記憶があった。スポーツ好きの彼女は税理士試験ゼミに所属している。二人で会っていると京介の心はときめいた。とても印象が良い。包容力があって落ち着きがありチャラチャラした軽薄な感じは無かった。話していると楽しくなる大人の雰囲気を持っている。

「もう11月ですから、実践スタイルでやりましょう。知り合いに人事部門の経験者がいますから、その年配者を相手にやってみませんか」

ハキハキとした言い方であるが嫌味は無い。すこし厚めでポッチャリした唇が京介は好きである。視線が奪われていた。

「ねえ、聞いているの？」

「えっ——、はい。わかりました！」

大声で返事をした。周りが見えなくなっている自分。

「では、正式に面接日を郵便で通知します」

京介はメンバーに知らせた。郵送されてきたのは3日後である。驚いたことにホテルで日曜日に実施すると書いてあった。料金の関係でメンバー全員が慌てたが——。

「無料。スポーツジムを利用するから」

と、望月小夏は平然と言った。

模擬面接の当日も、また、驚かされたのである。面接担当者が4人もいる。中央に代表取締役社長として男性。右に女性の専務、左に男性の常務、専務の隣に80歳は越えそうなオバサンがいた。監査役と書いている。京介は芸の細かさに驚いた。

面接が終わる。京介の驚きは最後まで続いた。最後の面接者となった京介だけ30分もかかったのだ。他のメンバーは15分前後だろうか。

「評価結果は、のちほど文書で郵送します。これからの就職活動の参考にしてください」

一人一人の面接が終わり、最後にメンバー全員が椅子に腰かけると代表取締役は言った。その言葉に、京介は一人だけ立ち上がり、

「自信ができました。ありがとうございます」

そう言って礼を述べ袋から包みを出す。

「全員が出し合って購入しました。お口に合いますかどうか。スポーツドリンクです」

京介が差し出すと、なぜか社長は顔を高潮させ、しかも感激して受け取った。

数日が経過し模擬面接の結果は気になったが、それよりも別のことに支配されていく。キャンパスで望月小夏を見かけないのである。ちょっとスランプ気味で集中力が無い。今もそうだ。大学の教室で授業を受けていたが

窓際の席にいてもあって外に視線が遊びに行く。だが、泳ぐだけで定まらない。

（あの唇。誰が食べるのかなあ～気になるなあ～いただきます～す。チュッ、チュッ！）

隣に座っている学生がチラッと見た。視線を感じたのである。

（望月小夏さん、パクパク、パクン——）

そのとき異変が起きた。気味悪そうにした隣の学生ではない。窓の外である。

突然、一人の男が横切った。視線が合う。ただ、それは不自然だった。なぜなら垂直に横切ったからである。上から下に。あれっと思ったとき騒ぐ声がした。

「飛び降り自殺。うちの学生だ——！」

外に人が集まってくる。教室は誰もいなくなった。講師も飛び出していく。京介だけが残された。残像——ガッと見開いたあの目が、足を止めているのだろうか。しばらくしてノートに、しずくが落ちた。泣いている。どうして泣くんだろうか。京介は自問した。なぜか涙が止まらない。不思議だった。他人のことなのに。

生きていたら、何か良いことに会えるだろうか。サプライズに遭遇するだろうか。それは京介が、ずうっと考えていたことである。しかし、そこに良い運と、悪い運が存在するとしてたら……。

父と2人の兄は平凡なサラリーマン。母はパートで働いている。そんなに運が良いとは言えない家庭で誕生した。少しでも気を抜くと、わずかでもヘタレになると居場所が消える……自殺した人と重なっていく自分。

『内定を取り消されて男子大学生が自殺！』

記憶している新聞の記事。評論する人は多いが、そこに真の同情は感じられない。

模擬面接の結果は郵送で届いた。届いたのは他のメンバーだけである。京介は望月小夏から口頭で告げられた。二次面接があると。

「二次面接……ですか」

「そう。他の人には内緒でね」

望月小夏の、厚めでポッチャリした唇が意味ありげに微笑む。

株式会社レジェンド・ライフ。行くと社長室と書かれた隣の応接室に案内された。そこには見慣れた顔の社長と専務、監査役がいる。

「お待ちしております」

社長と専務が立ち上がると名刺を差し出す。社長は望月卓郎。専務は望月圭子。望月小夏の両親と自己紹介した。座っていた監査役の老人は祖母だと言う。いずれも株式会社レジェンド・ライフの本物の役員である。

「あなたを採用したいが、いかがですか。内定ではなく本採用です」

「本当ですか。ぜひ、お願いします！」

内心、歓喜する。

（サプライズだ。間違いなくサプライズだ）

「承諾してくれてありがとう。書類と旅費は隣の会議室で受け取ってください」

「ありがとうございます」

礼儀正しく頭を下げて応接室を出ると隣の会議室のドアを開けた。驚いたことに、そこには望月小夏が立っている。

小夏は先ほどまで白鳥玲子の模擬面接評価表を見ていたのだ。京介の全く知らないことだった。もちろん、コメント部分の欄外に、『小夏のお婿さん決定。早く食べなよ！！！』と、赤エンピツで書かれていることも――。

「内定をいただきました。うれしいです」

「わたしも」

そう言って小夏は近づくと京介の頬に唇をつけた。そして、

「本採用よ、わたしのお婿さん」

唇を軽く合わせる小夏。

京介は内心、叫んだ。

(ダブルサプライズだ。いや、これってトリプルサプライズ、いただきま〜す)

座右の銘は――スッポン根性――食いついたら離さない。

驚いた小夏の瞳が勢いよく中央に寄り、すぐに白目になった。明らかに酸欠になっていた。

終わり